

## ギリシア貨幣様式の東漸

これよりギリシア貨幣の様式および様式の一部である銘文がマケドニアより東方に伝播していく経緯を貨幣実物によって追ってみる。

この種の仕事には貨幣の真贋の問題がつきまとう。貨幣などの遺物に銘文がある場合、銘文の形式や文字の字形などによって、遺物の真贋が判明することはたびたび経験する。しかしながら、銘文以外の情報については専門外であり、それに拠って真贋に言及する立場にはない。そうはいつても、明らかに贋作とわかるものもあり、そのようなものは除外したつもりである。もっとも、複製であってもそれが精巧な複製であるならば、銘文を中心とした仕事にとって特段の不都合はない。なお、これより使用する貨幣は古代文字資料館所蔵のものである。

### 1. フィリッポスⅡ世の銀貨 紀元前4世紀

【現在】ギリシア一帯 【古】マケドニア

(表) 月桂冠を戴いたゼウス頭像。

(裏) ナツメヤシを手に持った騎馬像。ギリシア文字・ギリシア語でΦΙΛΙΠΠ-ΠΟΥ (philippou フィリッポスの) とある。



表



裏

この貨幣は 14.4g であるが、テトラドラクマ(4 drachms:17.2g)銀貨といってよいであろう<sup>1</sup>。素材の銀を両面より金型で挟み込み、神もしくは人の像を打ち出した円形の銀貨である。このタイプの銀貨はフィリッポスⅡ世から、息子のアレクサンドロス王に伝わり、王の有名な東征とともに東方世界に広がった<sup>2</sup>。ギリシア文字・ギリシア語でΦΙΛΙΠΠ-

<sup>1</sup> 単位と重量については David R. Sear, 1978 の XXX i 参照。

<sup>2</sup> 田辺 1992 には次のようにある。「ギリシア世界はマケドニアのフィリッポスⅡ世によって統一されたが、フィリッポスⅡ世は表に神の胸像、裏面にマケドニアの民族意識の高揚を暗示する騎馬像、戦車競争図などを刻印し、発行者たる国王の名前(属格)をギリシア文字で示した。その息子のアレクサンダーⅢ世(大王)はアケメネス朝を前 330 年に滅ぼし、西はエジプト・地中海から東はインダス川・オクサス川に及ぶ大帝国を作った。そして、オリエントにはしだいにヘレニズム文化が熟成していった。大王は表にヘラクレス神、裏面にゼウス神と自分の名前(アレクサンドロスのという属格)を刻印した 4 ドラクマ銀貨を標準貨幣として発行した。表のヘラクレス神は大王の肖像ともいわれるが、以後、オリエント世界にはこの大王のコ

ΠΟΥ (philippou フィリッポスの) とある。男性単数属格語尾ΟΥ (ou) を付した王名が何を意図したものか判然としないが、あるいは “フィリッポスの【貨幣】” ということであろうか。なお、フィリッポスやアレクサンドロスというカタカナ表記の末尾のオスは、男性単数主格語尾ΟΣ (os) を付した形。

## 2. アレクサンドロス大王の銀貨 紀元前4世紀

【現在】イラク 【古】バビロニア発行

(表) ライオンの頭皮を被ったヘラクレス頭像。

(裏) 椅子に腰を下ろしたゼウス像。右にギリシア文字・ギリシア語でΑΛΕΞΑΝΔΡΟΥ (aleksandrou アレクサンドロスの) とある。



表



裏

裏のイスの下にあるマークがバビロニア発行に係ることを示しているようであるが、この方面のことはよくわからない。かりにその通りであるとするならば、バビロニア遠征の紀元前 331 年以降のものということになる。イスの右側に、ギリシア文字・ギリシア語で ΑΛΕΞΑΝΔΡΟΥ (aleksandrou アレクサンドロスの) とあることは確認できる。

## 3. ディオドトスの銀貨 紀元前3世紀

【現在】ウズベキスタン東南部からアフガニスタン最北部一帯 【古】バクトリア王国発行

(表) 若いディオドトス肖像。

(裏) ゼウス立像。ギリシア文字・ギリシア語で右に ΒΑΣΙΛΕΩΣ (basileōs 王の)、左に ΔΙΟΔΟΤΟΥ (diodotou ディオドトスの) とある。



イン・タイプが踏襲されるようになった。」(54頁)。

表

裏

ヒンドークシュ山脈の北側すなわちウズベキスタン東南部からアフガニスタン最北部一帯にギリシア系のバクトリア王国の故地がある。バクトリアは、アレクサンドロス大王(在位。紀元前 336-323 年)の没後、その東征軍の一部であるバクトリアの総督ディオドトス I 世が興した王国である。なお、ディオドトスの名を持つ貨幣は二種ある。ディオドトスの老いた肖像のものと若い肖像のものである。両者ともにディオドトス I 世とする説と、老いた像をディオドトス I 世とし、本貨幣のような若い像を息子のディオドトス II 世とする説があるようだ<sup>3</sup>。いずれにしても、像は神のものではなく、王自身のものとなっている。神の頭像から王の肖像への転換はアレクサンドロスの死後にアレクサンドロスの肖像を採用することによってはじまったようである<sup>4</sup>。銘文は ΒΑΣΙΛΕΩΣ ΔΙΟΔΟΤΟΥ (basileōs diodotou 王ディオドトスの)のように王名の属格を含んでいる。アレクサンドロス大王が発行したギリシア様式の貨幣の影響によって作り出されたものである。

#### 4. メナンドロス(ミリンダ)王の銀貨 紀元前 2 世紀

【現在】パキスタン北部一帯 【古】インド・グreek朝

(表) ギリシア文字・ギリシア語で9時の位置より時計回りに ΒΑΣΙΛΕΩΣ (basileōs) ΣΩΤΗΡΟΣ (sōtēros) とあり、8時の位置より反時計回りに ΜΕΝΑΝΔΡΟΥ (menandrou) とある。全体で、basileōs 王の、sōtēros 救済者の、menandrou メナンドロスの、とあり「救済者たる王メナンドロスの」と読める。

(裏) カローシュティー文字・ガンダーラ語で3時の位置より反時計回りに maharajasa…欠…とあり、6時の位置より時計回りに menandrasa とある。全体で maharajasa 大王の、[tratarasa]救済者の、menandrasa メナンドロスの、とある。3 単語に単数属格語尾 asa がある<sup>5</sup>。「救済者たる王メナンドロスの」と読める。



表



裏

<sup>3</sup> 前田 1992 の 103-104 頁参照。

<sup>4</sup> アントリュ・バーネット 1998 の 50 頁参照。

<sup>5</sup> Burrow 1937 の 22 頁に単数属格語尾として -asa を挙げる。この書は中国トルキスタンのカローシュティー文書を扱ったものであり、本貨幣とは時代も地域も異なるが、これによって貨幣の asa をも属格語尾として大過はないであろう。

ギリシア系のバクトリア勢力はヒンドゥークシュ山脈を越えて、インドの西北部に進出し、紀元前 2 世紀頃には独特の文化を花開かせ、興味深い貨幣を発行した。詳しくは「二言語併用貨幣の出現」の項で述べるが、ギリシア語とガンダーラ語を表裏に打刻した二言語併用貨幣(正確には二種文字・二言語)を発行したのである。なお、この王朝はインド・グreek朝とも呼ばれている。ここに紹介した貨幣は有名なメナンドロス(ミリンダ)王の銀貨である。表にはメナンドロス(ミリンダ)王の肖像があり、周囲にギリシア文字・ギリシア語で“救済者たる王メナンドロスの”とある<sup>6</sup>。“救済者たる王”および“王”という語成分は増加しているが、フィリッポス II 世以来の王名の属格が“メナンドロスの”としてみられる。インドとの接触によりインド的な要素を取り入れるが、やはりギリシアの貨幣様式を保っている。

銘文の方向について、すでに不審に思われたかもしれないが、王名の書記方向と修飾成分の書記方向とが異なっている。これは次のようなことである。まずギリシア文字銘文を例とする。

ディオドトス II 世の銘文		メナンドロス(ミリンダ)王の銘文
① Β Α Σ Ι Λ Ε Ω Σ 【他の語】	⇒	円形の周囲に沿って時計回りに配置
② Δ Ι Ο Δ Ο Τ Ο Υ 【王名】	⇒	円形の周囲に沿って反時計回りに配置

ディオドトス II 世の銘文のギリシア文字は左から右に横書きされ行は①②のように上から下に進む。メナンドロス(ミリンダ)王の銘文は①に相当する修飾成分を左から右に貨幣の周囲に沿って配置したため時計回りとなっている。②に相当する王名もやはり左から右に貨幣の周囲に沿って配置したまでのことで、そのために反時計回りとなっている。両者ともに貨幣の正面から見て、左から右に横書きされた二行の文字列を読むという点では変わらない。カローシュティー文字は、ギリシア文字とは逆で、右から左に横書きされるため、①に相当する修飾成分は反時計回りとなり、②に相当する王名は時計回りとなる道理である。

なおギリシア文字 A の字形をご覧頂きたい。アレクサンドロス大王やディオドトス II 世のものとは異なり、A の中央横線が右上がりとなっている。このような字形はパピルスに記された『旧約聖書エゼキエル書』(紀元後 3 世紀前半)などにも見える<sup>7</sup>。

### 5.1. カニシカ王の銅貨 1 紀元後 2 世紀中頃

【現在】パキスタン一帯 【古】クシャン朝

(表) ギリシア文字・ギリシア語で右側 1 時の位置より Β Α C Ι Λ Ε V C Β Α C Ι (basileus basi) とある。左側には 7 時の位置より [Λ Ε ω Ν Κ Α Ν Η ρ ] Κ Ο V (leōn kanēshkou) とあったはずである。[Λ Ε ω Ν Κ Α Ν Η ρ ] は摩滅しており不明であるが田辺 1992(p. 176) を参照して補った。全体で Β Α C Ι Λ Ε V C Β Α C Ι [Λ Ε ω Ν Κ Α Ν Η ρ ] Κ Ο V (basileus 王の、basileōn 諸王の、kanēshkou カニシカの。諸王の王カニシカの) となる。

<sup>6</sup> 中村 2004 参照。

<sup>7</sup> 松本 2001 の 329 頁に掲載された資料を参照。

(裏) ギリシア文字・ギリシア語でNANAIA (nanaia ナナイア(女神名))。



表



裏

インド西北部ではギリシア系の王による支配の後、幾つかの民族の興亡があり、紀元後1世紀中頃にはクシャン族のクシャン朝が興った。その中心部はガンダーラであり、現在のペシャワール付近とされる。紀元後2世紀中ごろには、あの有名なカニシカ王がこの地を治めた。上はカニシカ王が発行した銅貨である。表にはクシャン族風の人物の立像があり、周囲はギリシア文字・ギリシア語の銘文がある。左側はだいぶ摩滅しているが、田辺1992(p. 176)に掲載されている同種の銅貨により補うとBACIΛEVC BACI[ΛEWN KANHϐ]KOV (basileus basileōn kanēshkou 諸王の王カニシカの)と読める。貨幣左上に“KOV”を確認することができるので、王名属格の“カニシカの”があったことがわかる。これまでのような神や人物の頭部の像は用いられないが、やはりギリシアの貨幣様式を彷彿とさせるものがある。

興味深いのはギリシア文字銘文の字形である。ギリシア文字のAとΣとEとYに相当する字形はこれまでのものとは異なる。Aの中央横線はV字形に窪んでいる。Σはラテン文字のCと同形となっておりEも丸みを帯びている。同様の字形は他の資料でも確認することができる<sup>8</sup>。なお、YはVとなっている。これらは字形の問題である。ところで、BAΣIΛEΩΣは、この貨幣ではBACIΛEVCと表記されている。男性単数属格語尾ΩΣ(ōs)は、ここではVC(=YΣus)となっているわけであるが、これが何を示すものか、専門家によってどのように扱われているものか寡聞にして知らない。

なお、摩滅のために見えない部分であるが、字形において興味深い点を含むので触れておきたい。田辺1992(p. 176)の写真を参照して補うと、BAΣIΛEΩNは、BACI[ΛEωN]と表記されているようだ。Ωはωとなっている。このような字形も他の資料でも確認することができる(注7の松本2001参照)。さらに、[KANHϐ]KOV (kanēshkou カニシカの)とある。このϐはカニシカの“シ”の表記のために新たに作られた文字とされ、ギリシア文字の一覧表の中にはない。このように、ギリシア文字・ギリシア語銘文のなかに、バクトリア語の音韻を表記するために作られた文字が使用されているわけであるが、

<sup>8</sup> Aについてはブライアン・クック1996参照。ローマ帝政期の碑文(43頁)、紀元前2or1世紀の碑文(53頁)など。ΣとEについては松本2001に掲載された『旧約聖書エゼキエル書』(紀元後3世紀前半)参照。

この事実は、本貨幣の発行時には既に、次に紹介するようなギリシア文字でバクトリア語を表記する正書法が確立していたことを予想させる。なお、ギリシア文字の異体字を集めた表は David R. Sear, 1978 に見える。これはなかなか便利な表である<sup>9</sup>。

## 5.2. カニシカ王の銅貨 2 紀元後 2 世紀中頃

【現在】パキスタン一帯 【古】クシャーン朝

(表) ギリシア文字・バクトリア語で右側 2 時の位置より時計回りに  $\rho$  A O K A (shaoka) とあり、左側 8 時の位置より N H  $\rho$  K I (nēshki) とある。全体で  $\rho$  A O (shao 王)、K A N H  $\rho$  K I (kanēshki カニシカ) とある。吉田 1992 を参照すると、 $\rho$  A O の O は単数直格語尾、K A N H  $\rho$  K I の I は単数斜格語尾のようであるから「王カニシカの」ということであらうか。なおこの種の銅貨で銘文がこれほど完全に近い状態でみえるのはめずらしい。

(裏) ギリシア文字で M I I P O (miro ミイロ(神名))。



表



裏

これもカニシカ王の発行に係る貨幣である。こちらの貨幣はなかなかユニークで、なんとその銘文は、ギリシア文字で書かれたバクトリア語(イラン語系統)となっている。表記の対象はギリシア語ではないが、文字としてはギリシア文字を利用しており、 $\rho$  A O K A N H  $\rho$  K I (shao kanēshki (王カニシカの)) と読める。おそらく kanēshki を王名の属格とみてよいのであろう。やはりギリシアの貨幣様式が色濃く残っている。

## 6. その他

以上ギリシア文字銘文を中心にギリシアの貨幣様式の伝播を見てきたわけであるが、円形・打刻という様式のみでの伝播となると、タリム盆地のホータン一帯で発行されたとみられる所謂“シノ・カローシュティー銭(ホータン馬銭、漢佉二体銭とも言う)”(紀元 2 世紀後半頃)がある。これは漢字漢文とカローシュティー文字ガンダーラ語の銘文を持つ円形・打刻銭である。時代も降り、モンゴル時代になると各ハン国よりアラビア文字銘文の円形・打刻貨幣が発行される。

なお、張忠山主編 1999 によると、1960 年代に陝西省・甘肅省・安徽省などの地からギ

<sup>9</sup> David R. Sear, 1978 の x x x i x に異体字を集めた表がある。ただし、どのような資料によったものか不明。

リシア文字を模した銘文が鑄込まれた鉛銭が総計 309 枚ほど発見されたという。この貨幣の来歴については様々に論じられており未だ定論がないようなので暫くは考慮の外におくことにする。

【参考文献（発行年順）】

Burrow, T. 1937. *The Language of the Kharosthī Documents from Chinese Turkestan*. Cambridge: Cambridge University Press.

渡邊 弘 1973. 『西域の古代貨幣』, 学習研究社。

David R. Sear, 1978. *Greek coins and their values (Volume I :Europe)*. Seaby: London.

田辺勝美編 1992. 『[平山コレクション]シルクロードのコイン』, 講談社。

前田耕作 1992. 『バクトリア王国の興亡』(レガルス文庫), 第三文明社。

吉田 豊 1992. 「バクトリア語」, 『言語学大辞典 第3巻 世界言語編(下-1)』三省堂, 111-115 頁。

ブライアン・クック著/細井敦子訳 1996. 『大英博物館双書失われた文字を読む5 ギリシア語の銘文』學藝書林。

張忠山主編 1999. 『中国絲綢之路貨幣』, 蘭州大学出版社。

P. L. グプタ著/山崎元一他訳 2001. 『インド貨幣史 一古代から現代まで』刀水書房。

松本克己 2001. 「ギリシア文字」, 『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』三省堂, 321-333 頁。

NHK「文明の道」プロジェクト 2003. 『NHKスペシャル文明の道 ②ヘレニズムと仏教』, 日本放送出版協会。

中村雅之 2004. 「カローシュティー文字貨幣3種」, 『KOTONOHA』第22号, 1-3 頁。

アンドリュー・バーネット著/新井佑造訳 1998. 『大英博物館双書⑥古代を解き明かす コインの考古学』學藝書林。

(文責：吉池孝一 2010. 4. 14)